

丸子山城跡調査団（団長西本省三）編

『倉橋多賀谷氏と丸子山城跡』

下向井 龍彦

倉橋町はいま、町おこしをめざして模索している。一九六一年に開通した音戸大橋によって呉市と結ばれた倉橋町は、造船と鉄で躍進をとげる呉の活気の余光に浴していた。工場通勤、近郊農業、漁業。だが構造不況下の今日、倉橋町の置かれた状況は厳しい。活路は自らの手で切り拓いていかなければならない。近年、倉橋町では、町立歴史民俗資料館の開館、桂ヶ浜神社本殿の重文指定、町史編纂事業の開始など、

自らの歴史と文化財への関心が高まりをみせている。かかる歴史の再発見の気運は、町の将来のヴィジョンをいかに策定していくかという切実な課題と深く結びついているように思われる。本書は、このような現実的な課題を背景として企画された、町史再発見の第一歩である。

本書は、本文五〇頁、カラー写真二頁（丸子山城全景、桂ヶ浜神社本殿）、おりこみ地図（城跡、遺跡分布図）一枚の

冊子であり、表紙を、北方山腹からながめた、静謐の安芸灘をのぞむ丸子山城本丸跡の雄姿がかざっている。構成は次のとおりである。

はじめに

倉橋多賀谷氏の興亡……………河合 正治
丸子山城跡とその考察……………西本省三

資料編

- 一、倉橋多賀谷氏をめぐる遺跡
- 二、倉橋多賀谷氏をめぐる文献
- 三、倉橋多賀谷氏関係地図

河合正治氏「倉橋多賀谷氏の興亡」は、安芸海賊衆についての著者年来の見解（南北朝期における伊予衆の北上）を基礎にしながら、随所に新知見をおりこんで、倉橋多賀谷氏の歴史を描く。まず、本浦小林に鎮座する春日社を、平安末く

鎌倉期の摂関家領平等院舞装束料所の倉橋荘時代に、藤原氏の氏神春日社から荘の鎮守神として分祀されたものと想像する。悠久の過去に属する史料上のわずかの記載が、にわか身近で現実的なものに感じられる。倉橋多賀谷氏は、関東御家人に出自をもち（本貫は武蔵国多賀谷）、南北朝期に伊予北条郷から北上して倉橋島に拠点を置き、室町ノ戦国期に一貫して大内氏に臣従しつづけ、敵島合戦を前に毛利氏に滅ぼされる。その多賀谷氏と大内氏の緊密な主従関係を、桂ヶ浜神社本殿の文明十二年棟札にみえる「平朝臣弘重」（多賀谷氏は本姓平氏）が大内政弘の一字を賜ったものであること、また神社蔵大般若経が大内氏の氏寺興隆寺住僧によって書写され、大内氏から多賀谷氏に下賜されたものであること、などから具体的にうらづける。また年末詳八月三十日付白井賢胤宛て陶晴賢書状（白井文書）にみえる手負・軍忠状十一通に注目し、倉橋多賀谷氏滅亡が敵島合戦前の弘治元年八月であり、多賀谷氏滅亡にさいして、陶方警固奉行白井賢胤が救援に向かい、毛利勢と戦って多数の負傷者を出して撃退された事実を明らかにする。これまで伝承として伝えられてきた倉橋多賀谷氏の動向を、乏しい史料と、現地の文化財によって生き生きと描き出している。

ただ、敵島合戦後の毛利時代の叙述が、ほとんど『芸州倉橋浦風土記』の伝承に依拠している点がおしまれる。敵島大願寺文書の「倉橋新藏充勝吉書状」からかいまみることができ

る村落・民衆の動向、『譜録』山本藤左衛門直矩家伝書の「芸州倉橋島領知仕居候処、元就公敵島御合戦之勲ノ奉仕地ノ三ヶ島松垣・山県・山本之間家、御船手警固役相勤候通申云候、……其後隆景公高麗御渡海之節、宮王丸与申御船御預被成御供仕……」の記事にみえる、毛利時代の倉橋島給人山本氏（かつての呉衆の総帥山本氏の一族だろう）の存在、などに注目したい。

西本省三氏「丸子山城跡とその考察」は、多賀谷氏居城丸子山城跡についてはじめての調査報告である。丸子山城は倉橋湾に向かって突出した火山支尾根の先端丘陵を縄張りとし、突端部を掘り切りで独立させて内郭（本丸・二の丸・三の丸など）、外郭を配した水軍城であり、本丸跡の段々畑の石垣を腰郭、「城之岸」の小字名を斜面を切り落とした切岸の名残りとも、湾入部を船隠し、船溜りとみわたる。丘陵最高部の平坦面、背後の掘り切りは、水軍城の特徴を示しており、往時を彷彿とさせるが、耕地化によりかなりの変容を被っているはずの現在の地形に、そのまま中世山城の一般モデルの機能と名称をあてはめてよいものか、素人としては素朴な疑問をいだかざるをえない。丸子山城と有機的に連繋する支城群については、資料編一（白）「丸子山城をめぐる城と砦」に詳しいが、そこで紹介されているものほかに、宇重極の「城ヶ涯」、大迫の「船隠し」、亀ヶ首の「城山」などの地名は注意しておく必要がある。また、丸子山城を中心とする支

城の配置を水軍の一般戦術（攻撃・防禦）、多賀谷氏をとりまく政治動向などと関わりさせて、全島規模で有機的にとらえなおす必要があらうと思う。たとえば、音戸町と倉橋町の境界線にある倉橋側釣土田の「大城戸」、音戸側先奥の「城戸」の小字は、倉橋多賀谷氏と波多見島に拠る対抗勢力の対時関係を想像させる。いずれにせよ、都市化・工場化によって次々と破壊されていった芸南沿海地方、芸予諸島の多くの水軍城跡のなかで、倉橋丸子山城は保存状態の良好な数少ない事例であり、今後さらに精密な調査・研究が望まれる。芸南地方の水軍城跡の現状の総合的調査の必要も強く感じる。

資料編では、城跡の他に国の重要文化財に指定された桂ヶ浜神社本殿、同神社文明十二年棟札、永正十一年墨書、多賀谷氏墓と伝えられる五輪塔、海越土佐守墓と伝えられる宝篋印塔、白華寺石仏、岐島神社宮棚守房頭「房頭覚書」が記す多賀谷氏関係記事、一八世紀に西蓮寺住職性添が編述した『芸州倉橋浦風土記』第一卷「古事談門」の多賀谷氏興亡の部分を紹介する。

ともあれ、本書の刊行によって、倉橋町の人々に対して、自ら拠って立つべき倉橋島の海と山にきざみこまれた祖先の営みのうち、中世の部分がようやくその姿をあらわにしはじめた。倉橋は徹頭徹尾、海に生きる島であった。古代・近世・近代の歴史はその事実をさらに深くつきつけてくるであろう。この原点に立って、倉橋町はいま、町おこしの道を模索

している。

（B5版 五二頁 昭和六十一年三月 安芸郡倉橋町発行。
購入御希望の方は、〒731-13 安芸郡倉橋町四三一 倉橋町教育委員会宛てに、直接お申込み下さい。定価 一、一二〇円）